

『甘えたがりのお客さま』

著:高月まつり

ill:明神 翼

「あれ、ベルギーのフレーバービールでしょ？ いろんな味があって美味しいですね。俺はビールならエールの方が好きだけど」

「ああ……俺もエールは好きだ」

「じゃあ今度一緒に飲みに行きましょう。ね？」

「なぜ」

夏輝がそう言うと、玲司は残念そうな顔を見せる。

なんなんだこいつは。子どもか！ 二十四歳のサラリーマンが、子どもみたいな態度を取るな、鬱陶しいっ！

本当はそれを口にしたかったが、これ以上目の前で凹(へこ)まれるのも見たくない。夏輝は「俺は社交辞令は嫌いなんだよ」と言って、玲司の前に一口チョコレートを置いた。

水割りよりはストレートに合う物だが、つまみとしては悪くない。

玲司の前には、カシューナッツと一口チョコレートの二つのつまみが揃った。

「俺、チョコレートが好物なんです。ありがとうございます。どうして夏輝さんに俺の好きな物が分かったんだろう」

「気色悪いことを言うな。単に、最初に塩辛いつまみを出したから、今度は甘いつまみを出したっただけだ」

「そうですか。でも嬉しいな」

玲司はチョコを口に放り込み、「旨い」と無邪気な笑顔を浮かべる。

「夏輝さんは優しい。だから触ってもいいですか？ その切れ長の目尻とか、まぶたとか……意外と睫(まつげ)が長いんだな。ちょっと流し目で俺を見てくれますか？」

「ふざけんな」

「それなら、俺の友だちになってください」

「だから、そういうことをいちいち言うな」

この酔っ払い。どこの小学生だお前は。

夏輝は心の中で突っ込みを入れ、今度はショットグラスでなく、ジュース用のグラスにたっぷり水を注ぎ、玲司の前に置いた。

「実は自分も、ちょっと浮かれて混乱してます」

夏輝はしかめっ面で玲司を見て「お前、気色悪い」と言った。

大変お上品な合コンは無事終了した。

集まった連中は、まるで商談に来た営業マンのように名刺を交換し、またはその場で、通信端末に互いの情報を入れ合った。

夏輝はスナックを入れた保温器のスイッチを切りながら、残り物を見て「もったいない」と呟く。かといって、誰が箸をつけたのか分からない物を、容器に入れて持って帰りたとは思わないので、燃えるゴミとして処理する。

「夏輝一、余ってる冷凍食品があるんだよね？ 貰ってもいい？」

解凍していない分は業務用の冷蔵庫にきっちり保管してある。双子のウェイターは、それを指さしながら尋ねた。

ああお前ら、もう少し空気を読め。俺の背後には幹事がまだ残っているんだぞ？

右手で額を押さえて低く呻(うめ)く夏輝を笑いながら、玲司が「俺は持って帰ったりしないから、好きなだけ持って行っていいよ」と言った。

双子は「やった」とクールに喜び、すぐに後かたづけに入る。

「もう酔いは覚めたか？」

「はい。俺は飲むとおしゃべりになるんですが、家庭の事情を語ったのは初めてで……見苦しいところをお目にかけてすみません」

「いや、気にすんな」

「まったく気にされないと、それはそれで寂しいというか……」

玲司が近づき、いきなり夏輝の頬を両手で包む。

「おい」

「すぐ終わります。触りたかっただけです」

すりすり、玲司の指先が夏輝の頬や目尻を撫でて離れた。

「お前……一緒に二次会に行こうってキャーキャー言ってた連中を笑顔で振って、なんで残っていやがるんだこいつと思ったら、これをやるためか」

「はい。夏輝さんに触れながら夏輝さんに見つめられるって贅沢ですね」

にっこりと笑う玲司の前で夏輝は呆(あき)れ顔をしながら、ワイシャツの胸ポケットから煙草を取り出して口に銜(くわ)え、慣れた手つきでライターの火をつけた。

もう仕事は終わったと判断して、気持ちよく一服する。

「煙草は体に悪いです」

「副流煙の心配をしているなら、お前が俺から離れろ」

「あの、俺のことを『お前』と呼ばないでください。それと『あんた』もやめてください。俺には玲司という名前があります。だから名前で呼んでほしい」

「なんでそういうことを真顔で言えるんだよ。恥ずかしいヤツだな」

「え？ 友だちになってくれとか、名前で呼んでってことですか？ 俺だって初めて言いましたよ。わざわざ言うことじゃないし……」

玲司は苦笑を浮かべ、煙草を吸う夏輝から離れない。

なんだろう、この、妙な敗北感は。

夏輝は玲司を睨むこともできず、視線を逸らして紫煙を吐き出す。

「客はさっさと帰れ。ここから先は、スタッフの掃除のお時間だ」

「そうですか……分かりました。ではまた、客としてここに来ます」

「いつも俺がいると思うなよ」

紫煙を吐き出しながら言う夏輝に、双子のウェイターは「いつもいるじゃないか」と揃って突っ込みを入れた。

玲司は歯を見せて笑う。

「これから仲良くなっていきましょう。そして、いつも俺を見てください。構って話しかけてください」

「言っておくが、俺はゲイやバイじゃない。迫って来たらぶん殴るぞ」

「俺は……」

玲司はそこで少し考え込み、「愛は性別を超えたいと思います」と意見を述べた。  
夏輝はカウンターに手を伸ばして灰皿を掴み、長くなった灰をポンと落とす。  
「うんうん分かった。モテる男はそういうもんだ。じゃあさようなら」  
「はい、さようなら。また来ますね」  
「だからなんで」  
「つい言い返してしまった。」  
「こういう、妙に人なつこい輩は放っておくのが一番なのに、夏輝は、今日に限って突っかかってばかりいる。」  
「たぶん……あなたの傍にいれば、あなたはずっと俺のことを考えてくれるから」  
「今のこれは……告白の言葉か？ どっかの小説みたいなセリフなんだが……。」  
夏輝は吸うところのなくなった煙草を灰皿に押しつけて火を消し、二本目を銜える。  
「きっとあなたに出会うことは運命だったんでしょ。本当に、また、飲みに来ます。では、今日はありがとうございました」  
玲司は軽く頭を下げ、店から出て行った。  
「夏輝が真面目に相手をするのは珍しかった」  
不機嫌な顔で煙草を吸う夏輝に、学が声をかける。  
「誰があんな、頭に花の咲いた坊ちゃんと真面目に話をするか」  
「話してたじゃんか。怒鳴りもせずに、しかもすごく楽しそうだった」  
すると彩花も「同じくー」と、真顔で言った。  
この双子は仕事は真面目だが人間観察の感想をわざわざ呟くのが玉に瑕(きず)で、しかもそれが的(まと)を射た感想だから、観察された方はたまったものではない。  
「あのな、そういうのは心の中でだけ思っとけ。いちいち喋るな。俺に失礼だ」  
「だって見つめ合ってた。触ってた。つまり、恋の予感だ」  
「相手は男だけど、あれだけカッコイイならいいのではないかと。面白そうだし」  
「黙れ、ガキども」  
夏輝は眉間に皺を寄せ、「さっさと後かたづけをすませろ」と双子を叱った。

本文 p39～45 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>